

# 熔鑄爐によるチタン砂鐵鑄の製煉法

(昭 21.3 月日本鐵鋼協會特別講演會講演).

谷 口 光 平\* 八木 貞 之 助\*

METHOD FOR SMELTING TITANIUM CONTAINING IRON SAND  
IN THE BLAST FURNACE

Kōhei Taniguchi, & Teinosuke Yagi

## Synopsis:—

It was not solved technically to use titanium containing iron ore in the blast furnace, because its operation becomes gradually difficult by the formation of solid matter at the furnace bottom in proportion to the titanium quantities charged. From the previous studies made in our and foreign countries, it is assumed that the formation of this solid matter is due to poor fluidity of pig iron and slag, which seems to be caused by ferrotitanium, lower oxides, nitrogen and cyanogen compounds of titanium formed during the reduction of  $TiO_2$  at the blast furnace high temperature part. It is also well known that  $TiO_2$  itself gives the good influence to the fluidity of slag.

Hence, to solve this problem the authors performed the smelting test on March 1937 with the experimental 1 ton Blast Furnace, so that during the smelting process, the  $TiO_2$  charged would go to the slag as much as possible and the inner temperature of the furnace be kept as low as possible by the formation of highly acid and easy melting slag. The result of this test was so successful, that we found no trouble at the furnace bottom even by charging 100% of the sintered iron sand which had 5.5% of  $TiO_2$ . So, to confirm this result more, we made the industrial tests of using titanium containing sintered iron under the above mentioned method on Dec. 1937 with the 220 ton Blast Furnace of Wanishi works, Japan Iron & Steel Co., and on May 1940 with the 10 ton Charcoal Blast Furnace of Minari Plant, Teikoku Seitetsu Co., Although the  $TiO_2$  in the slag were 5.8% and 18.7% respectively, the results were also very successful.

The practical smelting methods obtained from the above tests are as follows:

1. Keep the  $CaO/SiO_2$  of slag to 0.8-0.9 against the ordinary ratio of 1.1-1.4.
2. Prevent the reduction of  $TiO_2$  as small as possible by keeping the furnace temperature at its lowest within the possible operating condition. In our test this temperature was 50-100°C lower than the ordinary condition.
3. Use a suitably larger quantities of Mn than the ordinary operation, so the fluidity of slag becomes better and make it possible for low temperature operation. Also, this acid and low temperature operation compensates the degradation of desulphurization.

## 緒 言

我國に頗る廣範囲に存在するチタン含有砂鐵鑄は一般製鐵用原料として色々缺點をもつてゐる。しかし普通鑄石の埋蔵量が非常に少い我國に於ては、その利用に関する問題は頗る重大で、古くより各方面に於て盛んに研究されて來た。

その結果砂鐵の鑄物學的・物理化學的及び冶金學的諸性質は頗る明確となり、電氣爐法、直接製鋼法等による利用は數多く工業化されるやうになつた。しかるに近代式熔鑄爐による多量利用については未だ充分に解決してゐない。即ち我國に於ける從來の熔鑄爐によ

\* 日本製鐵株式會社

る實地試験<sup>1,2)</sup>の結果は諸外國に於ける貧鑄<sup>3,4,5)</sup>と同様、チタンの裝入量が増加するに従ひ、鉄鐵及び鑄滓の流動性が悪化すると共に爐床に難熔性の固形物を生じ、次第に操業困難となる事が認められ、チタン含有原料を多量に使用した場合の連續操業は不可能とされてゐた。

その原因については、今までの研究結果<sup>1,4,5)</sup>を総合すると次のように考へられる。即ち爐内に裝入された  $TiO_2$  の一部は爐の下部に於て還元を受け、熔融點の高いフェロチタンを造ると同時に  $Ti_2O_3$  及び  $TiO$  のような不安定な低級酸化物となり、又一部は熔融點の高い Ti の窒化物・炭化物及びシアン化物となり、これらが銑鐵及び鑄滓のなかに入り、その流動性を害すると同時に爐床に溜り、いわゆるペアを形成する。しかし  $TiO_2$  そのものは鑄滓中に入つた場合ある量（約 35%）迄はその熔融點を低下させ、<sup>1,6,7)</sup> 且つ流動性を良好にする事が認められてゐる。よつて熔鑄爐操業に於てチタンによる故障をさけるためには、出来るだけ爐内溫度を低くして操業し  $TiO_2$  の還元をさけ、これを淬化する事が必要である。

ところが英國の Steward & Lloyds CO. の Corby 工場に於て熔鑄爐の新しい行き方である酸性操業、即ち熔鑄爐自體は脱硫を考慮せず熔融し易い酸性低温で操業し、出銑後ソーダ灰等の脱硫剤で脱硫を行ふ方法が初めて實施され、1936 年 T. P. Colclough によつて発表<sup>8,9)</sup>され世人の注目するところとなつた。そこで日鐵に於てもこれを詳細に検討した結果、本法が砂鐵を使用して低温操業を行ふに適する事を認め、當時八幡製鐵所研究所で操業中であつた試験用 1t 熔鑄爐によりこれを確める事とし、1937 年 3 月から實驗を開始した。その結果幸ひにも特殊な酸性低温操業による時は砂鐵を單味使用した場合に於てもチタンによる故障なく長期間連續操業の出来る事が明かとなつた。

そこで更にこれを確めるため輪西製鐵所に於て 220t 能力の熔鑄爐により 1937 年 12 月から大規模に長期間實地試験（砂鐵 55 % 使用）を行ひ又その後 1940 年 5 月帝國製鐵株式會社の求めに應じ、同社三成工場の 10t 木炭塔鑄爐により實地試験（砂鐵單味使用）を行ひいづれも 1t 熔鑄爐と同様、チタンによる故障なく連續操業の可能な事を實證した。以下これが大要を述べる。<sup>④)</sup>

### I 試験用 1t 熔鑄爐による實驗

#### 1) 原 料

試験に使用した諸原料の化學成分を第 1 表に示す。この内、砂鐵生鑄は北海道噴火灣産のもので、砂鐵燒

第 1 表 砂鐵製鍊試験時使用原料分析表  
(カハ換/熱試験炉用 AP)

種 別	Cw	TFw	FeL	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	CaO	MgO	P	S	%	
											CeO	TiO <sub>2</sub>
砂鐵生鑄	0.40	50.65	29.09	6.09	2.62	0.67	1.41	1.09	0.279	0.015	Trace	0.02
砂鐵燒結	—	44.01	18.28	20.13	4.36	0.42	1.33	2.82	0.111	0.006	—	5.50
砂鐵燒結（富鑄）	—	54.14	30.14	8.21	4.23	0.74	1.41	1.06	0.235	0.017	—	4.70
桃 沖	—	37.87	—	11.19	1.16	0.20	2.19	0.070	0.013	0.004	—	—
ジ ホ ー ル	—	61.93	1.51	5.50	2.77	0.16	0.26	0.20	0.106	0.012	0.005	—
石 利 原	—	51.11	1.07	11.50	2.39	0.10	0.20	0.176	0.002	0.004	0.004	—
比 島	—	60.94	3.01	4.05	3.23	0.14	0.14	0.103	0.133	0.154	0.050	—
ホーリー (40%)	—	5.67	—	11.35	4.21	3.49	3.74	1.54	0.127	0.019	0.006	—
石 灰 石	CO <sub>2</sub> 43.74	FeO <sub>0.5</sub> 0.05	—	0.08	0.16	—	53.19	0.601	0.020	—	—	—

  

種 別	灰 分	固 定 炭 分	全 灰 分	灰 分 中									
				SiO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	CaO	MgO	SiO <sub>2</sub>			
1) 実験 I 用	10.41	17.4	74.05	0.669	53.76	6.52	29.13	0.00	5.52	1.113	0.167	3.46	1.280
2) 実験 II 用	10.80	2.19	70.49	0.650	53.70	6.25	29.90	0.00	5.65	1.071	0.130	0.193	1.400

鑄（貧鑄）はこの生鑄に砂を配合して A.I.B 式焼結装置で焼結したものである。この貧焼結鑄は、熔鑄爐の酸性操業が貧瀆處理に適するので、これをも試験せんがため作つたもので、その品位は青森縣野生地方の砂鐵を目標とした、砂鐵燒結鑄（富鑄）は上記生鑄を同じく A.I.B 式焼結装置で單味焼結したものである。

これら諸原料のうち、各種鐵鑄石、マンガン鑄、石灰石は 5~10mm に、コークスは 10~25mm に篩つたものを使用した。

#### 2) 試験用 1t 熔鑄爐

試験に使用した熔鑄爐は八幡製鐵所研究所に於て 1935 年以來試験用として操業してゐた小型熔鑄爐である。當爐は Fe 約 60 % の鐵鑄石と灰分約 20 % のコークスを使用し、4.5m<sup>3</sup>/mn, 500°C の送風を行ふ時は、コークス比約 1.6 で 1 日約 1.2t の出銑を行ひ得る。又その場合製出銑鐵の成分は大形熔鑄爐の銑鐵と異らず、長期の連續操業にも耐える頗る便利なものである。

#### 3) 實 驗

##### (a) 實驗 I (砂鐵貧鑄製鍊)

酸性操業による砂鐵製鍊の可能性及び貧鑄製鍊の様子を試験せんがため、砂鐵燒結貧鑄及び桃沖鐵鑄石を使用して連續的に實驗を行ひ第 2 表のような結果を得た。その内 A から K までは送風量及送風溫度を夫々 4m<sup>3</sup>/mn, 500°C 一定とし、鐵鑄石は桃沖のみ使用の場合から砂鐵燒結貧鑄を 10, 20, 30……100% と切換え、その際鑄滓の CaO/SiO<sub>2</sub> が 0.6~1.0 の範囲に來るやうに石灰石使用量を加減し、CaO/SiO<sub>2</sub> が如

④詳細は日鐵八幡製鐵所技術研究所 自發研究 No.14 (昭 22) 1 月、又は日鐵技術部技術情報 No.5 (昭 22) 3 月を参照

第2表 実験I(砂鐵焼結鉱(富錳)製鍊試験)成績表 (ハサヒ脱硫試験各錠炉)  
(昭12年8月12日~18日)

序 号	操業時間	一回投入物	鉄筋石 セメント 石灰石 コクス 炉内合計 kg	炉内石 セメント 石灰石 炉内合 計 kg	投入量 kg	投 入 量 kg	出 量 kg	投 入 量 kg	投 入 量 kg	送風量 m³	温度 ℃	鍊 鉄						標準														
												C	S	Mn	P	S	T	温度 ℃	性 質	CaO %	SiO₂ %	流动性										
A	8-17	0	15,000	15,000	0.050	0.400	15,000	0	0	149	1,416	1,579	0.40	+	300	325	362	0.75	0.10	0.417	-	不可	44.64	20.65	10.05	-	0.60	方可				
A'	8-17	-	-	-	-	-	-	-	-	142	1,362	1,569	0.57	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-					
A'	15-30	-	-	-	-	-	-	-	-	153	1,456	1,570	0.58	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
A'	12-53	-	-	-	-	-	-	-	-	152	1,431	1,600	0.70	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
B	12-04	1,500	15,500	-	0.010	-	-	10	-	143	1,318	1,636	0.77	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-				
C	1-05	3,000	12,000	-	0.790	-	-	20	-	133	1,74	1,698	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
C'	10-57	-	-	-	-	-	-	4,000	-	151	1,332	1,703	0.91	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
D	12-12	4,500	10,500	-	0.160	-	-	10	-	149	1,261	1,778	0.97	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
E	3-52	6,000	9,000	-	0.710	-	-	40	-	155	1,241	1,803	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
E'	7-30	-	-	-	-	-	-	5,000	-	149	1,325	1,838	1.09	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
F	12-10	7,500	7,500	-	0.700	-	-	50	-	140	1,172	1,894	1.17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
G	3-33	9,000	6,000	-	0.670	-	-	60	-	140	1,149	1,942	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
G'	8-13	-	-	-	-	-	-	6,000	-	146	1,121	1,954	1.33	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H	12-11	10,500	6,500	-	0.660	-	-	70	-	143	1,052	2,050	1.61	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
I	11-45	12,000	3,000	-	0.610	6,500	-	80	-	145	1,017	2,140	1.69	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
J	13-10	13,500	1,500	-	0.580	7,000	-	90	-	153	1,050	2,226	1.86	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
K	16-47	15,000	0	-	0.550	7,500	-	100	-	147	910	2,375	2.08	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
L	7-24	16,500	-	-	16,500	1,100	8,200	-	-	141	144	1,007	2,143	1,96	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M	9-40	18,000	-	-	10,000	1,200	6,000	-	-	142	153	1,144	2,017	2,223	4.2	516	260	0.78	0.57	0.389	0.344	0.08	1,350	-	39.35	16.16	32.10	55.10	0.02	-		
N	73-53	19,500	-	-	19,500	1,300	9,400	-	-	143	140	1,194	1,865	2,27	4.0	657	243	0.05	0.53	0.346	0.335	0.07	1,345	-	39.07	37.71	31.24	53.63	-	-		
O	95-35	21,000	-	-	21,000	1,400	10,100	-	-	144	151	1,371	1,656	2,11	-	726	223	0.69	0.56	0.201	0.301	0.03	1,338	-	35.93	47.31	32.09	46.00	0.07	-		
P	147-29	22,500	-	-	22,500	1,500	11,000	-	-	145	140	1,317	1,683	2,44	-	750	150	0.32	0.17	0.247	0.024	0.01	1,343	不可	36.3	47.4	39.55	49.59	0.03	-		

何程の時銑鐵及び鑄滓の流動性が良好となるか試験したものである。その結果  $\text{CaO}/\text{SiO}_2 = 0.8 \sim 0.9$  の場合が最も良好な事が判つた。

この際砂鐵燒結貧鑄 100 % 使用の K 操業に於ては鑄滓の  $\text{CaO}/\text{SiO}_2$  は 0.3 ~ 0.9 の範囲にあり普通の鑄滓に比し餘程酸性となつてゐるにかゝらず銑鐵中の Si は 1.2 % 程度を示し、爐内温度は相當に低い事が認められたので、この操業を長期間續け、果してチタンによる故障が生ずるや否やを見た。その結果は約 170 時間(約 7 日間)の連續操業にもかかはらず、何等故障なく爐況頗る順調に操業し得られ、この程度の酸性操業による時は連續操業の可能な見透がついた。

次に L-P は鑄滓の  $\text{CaO}/\text{SiO}_2$  をその儘とし砂鐵燒結貧鑄の装入量を次第に増すと共に爐況に應じ送風温度を高くし何の程度まで重装入となし得るか試験したものである。その結果 O 操業即ち砂鐵燒結貧鑄 21 Kg Charge まで操業可能な事を示した、そしてこの場合コーカス比は 1.656 を示し、當溶鑄爐の富鑄使用による普通操業時のコーカス比 1.600 と比べ大差なく、酸性操業による時は貧鑄を使用するも相當の成績を以て操業可能な事が判つた。

(b) 實験 II(砂鐵製鍊に対するマンガン鑄の影響)  
實験 I により酸性操業による時は、砂鐵を單味使用

した場合に於ても連續操業の可能な事が明かとなつたが、その際の銑鐵の S 含有量は 0.205 ~ 0.381 % を示し頗る多くなつた。一般にソーダ灰による熔銑の爐外に於ける脱硫は頗る有效ではあるが、筆者等の経験によれば、ソーダ灰によるもかゝる高 S の熔銑を充分に脱硫する事は頗る困難で、作業的に順調な脱硫を行ふためには銑中の S は 0.12 % 程度が適當と考へられる。よつて酸性操業の儘、爐内でも更にある程度の脱硫を行ふ必要を感じ當實験を行つた次第である。

第3表は砂鐵燒結貧鑄を單味使用し鑄滓の  $\text{CaO}/\text{SiO}_2$  を 0.8 ~ 0.9 とした酸性操業に於て Mn 鑄装入量と銑鐵中の S % との関係を試験したものである。即ち Mn 鑄を使用せざる場合は銑鐵中 S は 0.72 % にも達するが、Mn 鑄の使用量增加と共に銑鐵中 S % は急速に減少し、銑鐵 t 当り Mn 分装入量 217 kg の場合は銑鐵中 S は 0.047 % となる。當實験により酸性操業の結果招來する爐内での脱硫率低下も、Mn 鑄の使用量如何によつては充分に恢復せしめ得る事が判る。なおこの場合 Mn 鑄使用量増加と共に銑鐵及び鑄滓の流動性が頗る良好となるのを認めた。

### (C) 實験 III(砂鐵富鑄製鍊)

以上の實験により銑鐵中の S % に應じ適當量の Mn 含有原料を使用して酸性操業を行ふ時は、砂鐵製鍊の

第3表 実験Ⅰ(砂鐵製鍊時に於けるマンガン鑄の影響試験)成績表

(於ハルガ1号試験熔鑄炉)  
昭和12年10月11日～昭和12年10月19日

序 號 案 子	時間 間	装入物 量	出銅 回数	鉄 鑄 量	送風 量	温度 度	鉄 鑄 錬 業						鉄 鑄 錬 業										
							分析 結果						分析 結果										
							C	S	Mn	P	S	T	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	T.O.	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>					
Sm 1	24-49 15,000	6,000 15,000	161	1.18	2,034	0	4.5	500	1.80	1.21	0.19	0.320	0.720	0.04	良	61.6	41.44	14.42	32.87	5.39	0.19	良	
Sm 2	25-00	1,000	6,200	-	154	1.14	3,019	4.51	-	2.02	1.20	0.48	0.383	0.426	0.07	-	122.0	39.96	13.91	33.07	5.34	0.93	-
Sm 3	23-25	2,000	6,400	-	156	1.17	2,005	9.02	-	2.00	0.77	0.89	0.398	0.204	0.03	-	81.4	39.05	13.19	31.12	4.46	0.78	優
Sm 4	30-46 13,500	3,600	6,400	-	163	1.12	2,183	17.60	-	2.58	0.57	1.33	0.427	0.184	-	-	29.0	37.63	10.92	30.48	4.78	0.81	-
Sm 5	29-37 12,000	4,000	6,200	-	169	1.04	3,431	217.2	-	2.94	0.89	2.94	0.447	0.047	0.09	優	97.5	38.17	10.63	31.50	4.45	0.83	-

参考: (a) マンガン鉱中 Mn 分率

可能なる見透しがついたので、砂鐵の入手に便利な輪西製鐵所に於て大型熔鑄爐による大規模な實地試験を行ふ事となつた。そしてその場合の試験方針としては實際の條件を考え、砂鐵は貧鑄でなく富鑄を使用し、且つその使用量は全鐵鑄石の約 50%とした。

そこでこれが實驗に先き立ち 1t 熔鑄爐で豫備實驗を行ふ事とし、第4表のような結果を得た。當實驗は

普通鑄石としてジョホール、利原、比島を使用し、これに砂鐵燒結富鑄を 50% 併用し、鑄滓の CaO/SiO<sub>2</sub> 及び Mn 鑄石使用量を適宜變更し、主としてこれらと銑鐵脫硫状況との關係を見んとしたものである。

輪西製鐵所に於ける原料條件を考慮し、銑鐵中 S 含有量を 0.12% 以下ならしめるためには、脱硫率は大體 77% 以上であればよいと推定せられる。

第4表 実験Ⅱ(砂鐵燒結富鑄[富鑄]50% 使用試験)成績表

(於ハルガ1号試験熔鑄炉)  
昭和12年10月20～昭和12年11月4日

序 號 案 子	時間 間	装入物 量	出銅 回数	鉄 鑄 量	送風 量	温度 度	鉄 鑄 錬 業						鉄 鑄 錬 業																	
							分析 結果						分析 結果																	
							C	S	Mn	P	S	T	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	T.O.	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>												
SA 3	6-24 7-30 7-30	2,250 3,000 22,500	15,020 15,020 15,020	0.60 0.60 0.60	3,000 15,020 15,020	1.0 1.0 1.0	1.64	1.45	1.679	45.4	4.5	600	1.84	1.56	0.74	0.378	0.214	0.06	良	75.3	44.53	15.72	25.52	6.73	0.58	優				
SA 4	49-37	-	-	-	-	-	212.0	3,200	-	-	1.59	1.475	1.674	84.6	-	-	1.91	0.96	1.00	0.434	0.351	0.03	-	72.5	41.38	14.49	26.52	6.50	0.64	-
SA 5	59-00	-	-	-	-	-	4,200	-	-	1.67	1.495	1.676	84.6	-	-	2.19	0.62	0.98	0.376	0.293	0.06	-	77.1	35.76	15.03	31.05	6.46	0.67	-	
SA 6	10-48	-	-	-	-	-	4,325	3,600	-	1.65	1.502	1.649	164.1	-	-	2.28	0.49	1.42	0.396	0.180	0.04	-	85.7	37.30	14.77	24.05	5.70	0.75	-	
SA 7	09-24 6-25 6-25	2,025 3,700 3,625	15,500 19,000 19,000	4,200	-	0.9	1.59	1.287	1.854	84.6	4.3	-	2.02	0.76	1.41	0.361	0.215	0.05	-	84.2	36.51	9.30	33.57	5.22	0.65	-				
SA 8	6-23	-	-	-	-	-	5,000	-	-	1.66	1.340	1.856	84.6	4.5	-	2.17	0.60	1.33	0.378	0.190	0.05	-	86.0	37.63	14.65	31.38	5.25	0.69	-	

参考: (b) 全装入物中 Mn

故に第4表の結果を参考とし、輪西での實驗に於ては鑄滓の CaO/SiO<sub>2</sub> を 0.8～0.9、銑鐵 t 當り Mn 分裝入量を 60kg 以上とするが適當と考へた。

## II 220t 熔鑄爐による實驗

## 1) 原 料

當實驗に使用した諸原料の化學成分を示すと第5表のようである。このうち砂鐵生鑄は北海道噴火灣産のもので、砂鐵燒結鑄はこの砂鐵生鑄に俱知安複鐵鑄を約 15% 配合し、輪西製鐵所のグリナワット式燒結装置で燒結したもので、その燒結具合は大體満足すべき結果を示した。コークスは灰分 17.3%，全硫黃 0.314% を示し、八幡製コークスに比べ共に頗る少いが、潰裂強度は八幡式ドラムテストにて約 56% を示し非常に低く、粉狀のが相當に多かつた。

## 2) 熔鑄爐

試験に使用した熔鑄爐は輪西製鐵所第3熔鑄爐で公稱能力は 220t、内容積は 355m<sup>3</sup> である。

第5表 砂鐵製鐵試験使用原料分析表

(れ輪西第3熔鑄炉 昭和12年11月～全13年2月) (%)

種別	C	W	TFe	SiO <sub>2</sub>	MnO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	S	P	Cu	T.O.	FeO	
利原	0.68	49.28	14.75	0.033	2.40	0.15	0.36	0.002	0.101	0.002	0.080	0.055	-	-
ジョホール	3.50	60.25	5.04	0.954	3.35	0.10	0.11	0.016	0.94	0.004	0.340	1.20	-	-
比島	4.20	58.01	6.55	0.059	3.10	0.11	0.26	0.026	0.127	0.069	7.31	-	-	-
シンガポール	7.20	56.78	4.57	0.297	7.00	0.18	0.15	0.045	0.065	0.012	0.20	4.31	-	-
瀬戸内 (7件)	1.3-5	55.94	1.79	14.440	1.26	0.33	0.22	0.011	0.037	0.020	0.081	Trace	-	-
香港	-	57.67	11.76	0.663	3.85	0.65	0.50	0.159	0.050	0.127	0.254	26.91	-	-
焼結	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
砂鐵 燒結	-	52.35	11.75	0.46	3.02	1.59	3.07	0.620	0.36	0.030	6.40	2.74	-	-
砂鐵 生鑄	-	51.44	10.00	0.50	2.93	0.002	4.96	0.030	0.347	0.002	9.05	2.44	-	-
平炉渣	-	9.00	23.47	10.49	4.15	41.61	0.71	0.155	0.622	-	-	-	-	-
ハマ マンガン鉱	-	2.08	4.65	38.05	1.50	2.57	1.17	14.13	0.038	0.019	0.9	2.7	-	-
石灰石	-	-	0.56	-	-	54.65	0.68	-	0.020	-	-	-	-	-
	V.M	F.C	Ash	T.S.	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	PbO	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>		
コークス	2.95	79.75	17.30	0.314	9.90	44.20	20.50	0.00	1.95	0.069	1.09	31.24	2.64	-

當熔鐵爐は當實驗を開始した昭和 12 年(1937 年)12 月までに吹入以來満 4 ケ年経過し、その間 1 日平均約 220 t の出銑があつた。

### 3) 實 驗

1t 熔鐵爐による豫備實驗の結果を基とし次の方針のもとに實驗する事とした。

1. 砂鐵燒結礦の最高使用量は、砂鐵生礦に換算し全鐵礦石の約 50% とする。
2. 鐵滓の  $\text{CaO}/\text{SiO}_2$  を 0.8~0.9 とする。
3. 銑鐵 t 当り Mn 分裝入量が 60kg 以上となる様 Mn 含有原料を使用する。
4. 出来るだけ爐内温度を低くして操業する。
5. チタンによる故障の排除を主眼とし、爐の能率は従的に考へる。
6. 銑中の S が 0.06% 以下となるように出銑後取鍋中でソーグ灰により脱硫を行ふ。

實驗は昭和 12 年 11 月 1 日より開始したが、最初は砂鐵を使用せず普通鐵石による酸性操業を 33 日間續けた後、12 月 23 日より砂鐵燒結礦の使用を開始し、次第にその量を増し、翌年 1 月 4 日には全鐵礦石の 54% に達せしめ、これを 2 月 3 日まで 31 日間繼續した後、次第にその量を減らし 2 月 8 日には 0 として實驗を終つた。

當實驗に於て眞に殘念な事には、砂鐵燒結礦の裝入を開始してから 4 日目に嚴寒のため鐵石槽からの鐵石の切り出しが意の如くならず、ストックラインが著しく低下したため、爐内温度の低下、爐床隆起、羽口破損等の故障が續出し、その結果 1 月 2 日から突然頑強なハンギングを引き起したのである。即ち送風壓力は著しく上昇し、四苦八苦の爐況となり、出銑量の激減、コークス比の著しい上昇を示した。しかしこの原因が砂鐵裝入のためでない事は明かであつたので、その裝入量は豫定通りとして操業を續ける事とした。その結果 1 月 19 日には砂鐵生礦使用率 55% のまゝハンギングもおさまり、その後は輕度のハンギングは時々あつたが概して順調に操業を續ける事が出来た。ことに 1 月 30 日以後は送風壓力も全く普通操業の場合と變らず、dirty hearth の様子は全く認められなかつた。よつて 2 月 3 日には、この程度の砂鐵使用量ならば製鍊の可能な事を認め、その使用量を減少せしめ、2 月 8 日に實驗を終了したのである。

當實驗に於ては上述のように最初原料供給上の故障から一時爐況を悪化させ、實驗として誠に不備なものとなつたが、砂鐵使用率 55% の爐況の恢復を計り得たので、考へ方によつてはむしろこの故障により砂鐵製鍊の可能性を一段と深めたものと云ふ事が出来る。

以上のようなであるから、普通操業と砂鐵操業との成績比較にあたつては、12 月 22 日から 1 月 18 日までの成績を除外し、12 月 13 日から同 22 日までの普通操業と 1 月 19 日から 2 月 3 日までの砂鐵操業との成績を比較する事とした。その結果は第 6 表の如くで、普通操業に對し砂鐵操業では出銑量は 282 t から

第 6 表 普通操業・砂鐵操業成績比較表 (普通操業 12 月 13 日~12 月 22 日)  
(砂鐵操業 12 月 13 日~2 月 3 日)

操業日	コークス比	鐵石 生礦 使用率	鐵石 燒結 礦 使用 率	鐵石 燒結 礦 量	1 回 入 量		出銑 量	炉内 温度	Mn 分裝 入量	出銑 率	成績 率	
					鉄 量	生 鐵 量						
12 月 13 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 14 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 15 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 16 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 17 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 18 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 19 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 20 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 21 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 22 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 23 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 24 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 25 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 26 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 27 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 28 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 29 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 30 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
12 月 31 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 1 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 2 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 3 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 4 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 5 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 6 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 7 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 8 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 9 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 10 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 11 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 12 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 13 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 14 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 15 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 16 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 17 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 18 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 19 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 20 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 21 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 22 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 23 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 24 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 25 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 26 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 27 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 28 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 29 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 30 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
1 月 31 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
2 月 1 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
2 月 2 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90
2 月 3 日	1.01	4.23	4.60	2,330	0	433	31	0.0	815	1,200	0	1.90

142 t に減少し、コークス比は 0.853 から 1.193 に増大したが、鐵滓の  $\text{CaO}/\text{SiO}_2$  は 1.01 に對し 0.83 を示し、銑 t 当り Mn 分裝入量は 27.3kg に對し、64.8kg を示し、出銑溫度は 1,433°C から 1,363°C に低下し、豫定の操業方針を満足してゐる。當砂鐵操業に於て鐵滓中の  $\text{TiO}_2$  が 5.818% に達するにかかるはらず、銑鐵中の Ti が僅かに 0.165% で普通操業のそれと大差なく、長期間連續操業をなし得たのは上記諸方針の結果として注目すべきである。尙ここに注意すべきは砂鐵操業に於て、かかる酸性低温操業にかかるはらず、銑中の S が 0.061% を示し、脱硫剤たるソーグ灰の使用が全く不要であつた事である。今兩操業に於て鐵滓及び銑鐵中の S の分配率、即ち

〔鐵滓中の S %〕  
〔銑鐵中の S %〕を比較すると、普通操業の 13.6 に對し砂鐵操業では 9.4 となり、明かに後者の方が鐵滓の脱硫能力は減少してゐるが、その減少程度は  $\text{CaO}/\text{SiO}_2$  及び爐内温度の低下に對し頗る少い。この事は Mn 含有原料使用量の大なる事及び  $\text{TiO}_2$  による脱硫效果<sup>10</sup>によるものと考へられる。尙當砂鐵操業に於て脱硫率は 39.0% を示し、普通操業の 89.9% と大差のないのは、上記理由の他に銑 t 当り鐵滓生成量が後者の 0.52 t に對し前者では 0.87 t となり、餘程大となつた結果である。又砂鐵操業に於て出銑量減少し且つコークス比の増大したのは原料品位の低下、砂鐵の難還元性及び送風溫度を著しく低下せしめた當然の結果である。

以上當實驗に於てチタンに依る故障なく連續操業を行ひ得られた最大の原因は、上記の如く出銑溫度が普通操業に對し 70°C も低く、爐内溫度もこれに應じ低

# 熔鐵爐による含チタン砂鐵鑄の製鍊法

目となり、 $TiO_2$  の還元を阻止し得られた點にあると考へられる。即ち本實驗に於ては、砂鐵使用時に於ける爐内溫度の比較試験を行ひ得なかつたので、dirty hearth の認められた從來の實驗結果<sup>11)</sup>と比較すると第7表の如く、從來の實驗では出銑溫度の測定を行つて

第7表 砂鐵單味鍊比較表

	純鐵中		鉛滓中 CaO/SiO <sub>2</sub>	鉛滓 TiO <sub>2</sub>	(鉛滓中 TiO <sub>2</sub> ) (純鐵中 TiO <sub>2</sub> )	出銑 溫度 (°C)
	Si%	TiO <sub>2</sub> %				
本實驗	0.95	0.65	0.83	5.0.8	21.2	1,363
從來の實驗	1.12	0.275	1.32	4.0.96	10.7	—

ゐないが、鑄滓の CaO/SiO<sub>2</sub> は本實驗の 0.83 に對し從來の實驗では 1.32 となり餘程鹽基性なるにかかはらず、鉄鐵中の Si は夫々 0.95% 及び 1.12% を示し、從來の實驗では本實驗に比べ餘程爐内溫度の高い事が推定される。その結果、Ti の分配率は本實驗の 21.2 に對し從來の實驗では 10.7 となり、本實驗では頗るよく  $TiO_2$  の還元を阻止し得られた事を示してゐる。

## III 10t 木炭熔鐵爐による實驗

帝國製鐵株式會社の求めに應じ、同社三成工場（島根縣仁多郡三成町）の 10t 木炭熔鐵爐により砂鐵單味製鍊試験を行ふ事となり、昭和 15 年 4 月 4 日より同 30 日まで、上述して來た操業方針に基き實驗を行ひ、その結果幸にしてその目的を達する事が出來た。

### 1) 原 料

試験に使用した諸原料の化學成分を示すと第8表のようである。

第8表 砂鐵製鍊試験使用原料分析表

(於帝國製鐵三成工場 10t 木炭熔鐵爐)

種別	T.Fe	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	MnO	P	S	TiO <sub>2</sub>	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	F <sub>2</sub> O	(%)
鐵 砂鐵燒結	56.76	9.63	3.03	1.45	0.92	0.77	0.54	3.059	4.89	0.036	28.40	
松 名古屋燒結	61.23	5.75	2.00	0.85	0.53	0.53	0.53	0.017	0.02	0.025	20.0	
石 利 原	52.24	10.87	2.65	0.67	0.301	0.45	0.072	0.150	0.05	0.003	2.53	
マンガン鉱	3.5	16.0	—	—	—	46.15	0.16	—	—	—	—	
石 灰 石	0.07	14.6	0.10	33.53	1.30	—	0.010	0.007	—	—	—	
水 分	T.C	灰分										
木 炭	3.33	93.5	11.2									

そのうち砂鐵燒結は當地方の眞砂々鐵をグリナワルト式燒結裝置で木炭粉を配合して單味燒結したもので、T.Fe は 56.76% にて普通の品位を示してゐるが、 $TiO_2$  は 4.89% にて北海道産のものの約半量となつてゐる。名古屋燒結とは硫酸滓を燒結したもので、名古屋方面より購入したものである。

### 2) 熔鐵爐

公稱能力 10t/day 內容積 8.02m<sup>3</sup> の丸型木炭熔鐵爐で、當爐は吹入れ以來當試験開始までに約 3 ケ月經

過し、その間鍛冶屋鐵滓及び普通鐵礫石の他に一部鍛燒結鐵を使用して 1 日 8~11t の出銑を行ひ、木炭比は 1.1~1.35 を示してゐたものである。

### 3) 實 驗

實驗方針として、鑄滓の CaO/SiO<sub>2</sub> は 0.9 を目標とし、銑中の Mn 分が 1.2% 以上となるように Mn 鑄石を使用し、且つ出銑溫度が光高溫計で測定して常に 1,400°C 以下となるよう爐の調節を行ふ事とした。

實驗は昭和 15 年 4 月 4 日、平常作業として砂鐵燒結鐵 45% 使用時より開始し、4 日間で 100% とし、これを 9 日間續け砂鐵燒結鐵のストックが少くなつたので、その後徐々に減少せしめ實驗を終つた。砂鐵裝入量の増加と共に出銑量は 10t 前後から次第に減少し、砂鐵 100% 使用の場合は 8~9t となり、木炭比は 1.3 より 1.47 程度に増し、鐵礫石 1 回裝入量は約 50 貢より約 47 貢と相減少し、裝入物中の Fe 分は約 29 貢より約 26.3 貢へと相當減少し、裝入回數、送風量及び送風溫度は何れも夫々約 85 回、約 28 m<sup>3</sup>/min、約 290°C で殆ど變らず。送風壓力は約 80 g/cm<sup>2</sup> より約 86 g/cm<sup>2</sup> へと稍增加した、以上の如くで、出銑量の減少及び木炭比の増加は、砂鐵燒結鐵の難還元性による當然の結果で止むを得ないが、爐況は頗る順調で、何等故障は認められなかつた。

次に當實驗中に得られた銑鐵及び鑄滓の化學成分を示すと第9表の如くで、銑鐵は製鋼用として頗る優良

第9表 銑鐵鑄滓分析結果  
(於 10t 木炭熔鐵爐)

出銑日時	5-6am 1300	5-6pm 1600	5-7am 300	5-8am 000	5-17am 100	5-17am 600
	砂鐵燒結鐵 使用率 (%)	54.4	70.6	80.4	100.0	100.0
銑 鐵 分 析 結 果 %	C	4.36	4.30	4.05	4.50	3.78
	Si	0.20	0.24	0.20	0.42	0.17
	Mn	1.27	1.19	0.90	1.62	0.95
	P	0.136	0.112	0.131	0.160	0.103
	S	0.012	0.006	0.009	0.004	0.012
	Cu	0.252	0.248	0.140	0.006	0.04
	Ti	0.13	0.13	0.13	0.20	0.33
	W	—	—	—	—	ナシ
	Co	—	—	—	—	ナシ
	V	—	—	—	—	ナシ
	Ni	—	—	—	—	0.02
	Ca	—	—	—	—	ナシ
	Mo	—	—	—	—	ナシ
鑄 滓 分 析 結 果 %	SiO <sub>2</sub>	35.92	33.56	37.10	32.12	30.60
	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	7.73	7.60	8.61	0.15	9.80
	CaO	36.45	36.94	33.80	33.73	20.06
	MnO	2.92	2.94	2.97	3.14	3.90
	MnO	5.11	3.06	5.33	4.14	5.21
	FeO	1.15	2.57	1.67	1.67	2.71
	P	0.010	0.010	0.019	0.018	0.010
	S	0.112	0.119	0.092	0.081	0.080
	TiO <sub>2</sub>	9.60	11.57	14.34	16.04	17.00
	K <sub>2</sub> O	—	—	—	—	0.63
	Na <sub>2</sub> O	—	—	—	—	0.39
	CaO, SiO <sub>2</sub>	1.01	1.10	1.05	1.05	0.94

な成分を示し、鑄滓中  $TiO_2$  は最高 18.7% に達してゐる。

要するに木炭熔鑄爐は燃料及び装入原料より考へ酸性の鑄滓で操業するのが通例であるが、砂鐵を原料とした場合、コークス吹熔鑄爐の實驗例と同様に、低温とマンガン鑄の使用等更に一般の操業工夫を加ふれば、單味でもなほ且つ實用上作業し得ることを確認したものである。

#### IV. 考 察

今までチタン含有鐵鑄石の熔鑄爐操業に於て、チタンによる故障なく安全操業可能と判定された鑄滓中  $TiO_2$  含有量の限度は、實驗者に依り異り、1.7~4.0% 以下とされてゐた。<sup>12)</sup> 然るに今回の實驗に於ては、その限度を求める事は出來なかつたが、220t コークス吹熔鑄爐の實驗では砂鐵を 55% 使用し鑄滓中の  $TiO_2$  は 5.8%，10t 木炭吹熔鑄爐の實驗では砂鐵を 100% 使用し鑄滓中の  $TiO_2$  は 18.7% となるも何等故障なく安全に操業する事が出來た。この事は熔鑄爐による砂鐵多量製鍊の最大難關とされてゐたチタンによる故障に對し、Mn 鑄石を適宜使用する酸性低溫操業の有效な事を立證すると共に、これが實用的解決を與へたものと言ふ事が出来る。

次に今回の輪西での實驗に於て相當なる酸性低溫操業にもかゝはらず、銑鐵中の S が低くソーダ灰の不要であつた事は、すでに述べたように Mn 及び  $TiO_2$  の脱硫效果によるものであるが、輪西製コークスの S 含有量が頗る低く、0.314% を示した事も見のがせず、八幡製コークスのように含有量 0.8% にも達する時は當然ソーダ灰等による脱硫は必要と考へる。

#### V. 結 論

八幡製鐵所 1t 試験熔鑄爐による實驗結果をもととし、輪西製鐵所 220t 熔鑄爐及び帝國製鐵 10t 木炭熔鑄爐により實地試験を行つた結果

(1) 鑄滓の成分:- 普通熔鑄爐操業に於ける爐滓の

$CaO/SiO_2$  は 1.1~1.4 であるが、石灰石装入量を少くしてこの値を 0.8~0.9 程度とする事

- (2) 低溫度操業:- 爐内温度を操業し得る範囲で低目とし、砂鐵中に含有する  $TiO_2$  の還元を阻止する事。この場合、出銑温度を目安として示せば、普通操業の場合に比し 50~100°C 低目である。
- (3) マンガン含有原料の使用:- 普通操業に比しマンガン分の装入量を適當に大として鑄滓の流動性を良好にし、低温操業を容易ならしめる。一方低溫酸性操業に基く脱硫能力の低下を補ふ。

以上の要領で操業すれば多量の砂鐵を使用するも、何等チタンによる故障なく連續操業の可能なる事を明かにした。但し一般に砂鐵は普通鑄石に比し還元し難いので、これを多量に使用する場合、ある程度出銑量の低下とコークス比の増大する事は止むを得ない。

(昭·22.9. 寄稿)

#### 文 献

- 1) 長谷川熊彦: 製鐵所研究報告 大正 15 年 (1926) Vol VI No.1
- 2) 長谷川熊彦著「砂鐵」219 頁
- 3) O.Simmersbach: St.u.E. (1914) S.72
- 4) F.E. Bachman and E.F. Cone: Iron Age (1914) P. 936, 1471
- 5) J.A. Heskett: Iron and Steel Inst. (1920) Vol. C. P. 201
- 6) A. Stanfield and J. Emorrison: Trans Roy Soc Can may (1926)
- 7) 梅津・藏、堺内富士雄: 日本鍛業會誌 昭和 5 年 (1930) P. 867, 994
- 8) Iron Coal Tr. Rev, 132 卷 (1936) P. 806
- 9) J. Iron. Steel Inst, 134 卷 (1936) P. 547
- 10) 澤村、中路: 水曜會誌 第 9 卷(1939)第 10 號 809 頁
- 11) 長谷川熊彦: 「砂鐵」第 44 表中 12 月 12 日より 12 月 16 日までの平均
- 12) 長谷川熊彦: 「砂鐵」178 頁